

台風

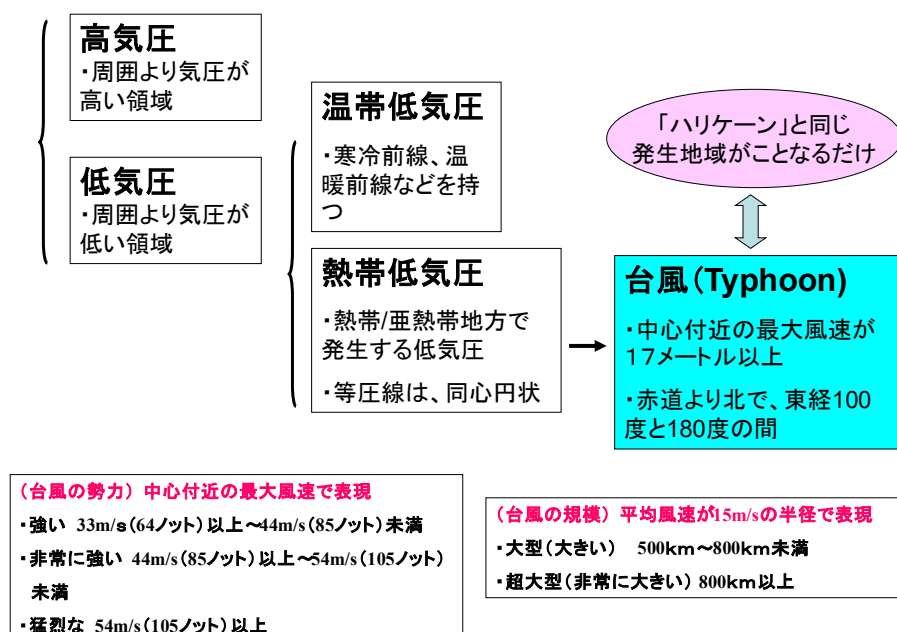
今年もすでに台風7号が発生し、台風シーズンが始まっている。台風のような激しい嵐は、平安時代には「野分（のわき）」と呼ばれ、「枕草子」では、「野分のまたのその日こそ、いみじうあはれにをかしけれ」とあり、野分の翌日はしみじみとした趣があると記されている。

ちなみに、「いみじうあはれにをかしけれ」は、台風一過、立藪、透垣などが乱れ、庭の盆栽や周囲の木々の枝が吹き折られ、倒れたさまを恨めしく描いており、これは野分の大風の仕業と表現している。現在でも、台風の襲来時にどこでも見られる光景であろう。

さて、「台風」という言葉は、明治の終わりごろ、当時の中央気象台長だった岡田武松が、気象用語に中国語の「颱風(たいふう)」を「台風」として、一般的になったと言われており、1946年に現在の常用漢字が定められて以降、「颱」は「台」が当てられ、「台風」となった。

◇ 高・低気圧、温帯低気圧、台風などの分類

まず、高・低気圧、温帯低気圧、台風などの現象は図1のように分類される。



◇ 図 1 高・低気圧、温帯低気圧、台風などの分類

したがって、図 1 に示した、「Typhoon」は国際的に決められた用語であり、中心付近の最大風速が 17 メートル以上、赤道より北で、東経 100 度と 180 度の間に存在するものをいう。

ここで、この図の下方に記されている台風の勢力に関して、「強い」があるが「弱い」が見られないことに注目願いたい。

これは 1999 年（平成 11 年）8 月 14 日に神奈川県山北町を流れる玄倉（くろくら）川で発生した水難事故がきっかけである。当時、横浜市の廃棄物処理会社に勤める社員やその家族、友人の 18 人が、ダム管理者の避難要請にもかかわらず、当時、気象庁から発表されていた台風の「勢力が弱い」が念頭にあったため、避難せずに中州に留まったため、増水によって流され 13 名が死亡したことがきっかけである。

気象庁は、従来台風の強さを「弱い」「並の強さ」「強い」「非常に強い」「猛烈な」の 5 段階で表現していたが、この水難事故を受けて、それまでの「弱い」「小型」といった表現では、予報を受ける側から見て「大した影響がない」「小雨程度」など軽微なものと誤解される可能性があり、防災上好ましくないということから、2000 年 6 月 1 日より、台風の強さの「弱い」「並の強さ」、台風の大きさの「ごく小さい」「小型」「中型」の表現を廃止するなどの措置に踏み切った。

◇ 台風の発生・接近・上陸

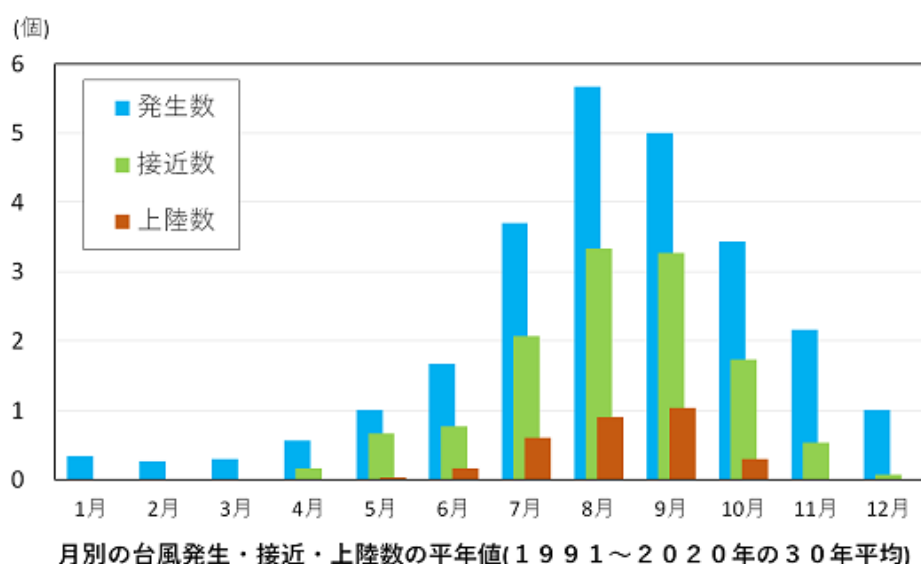


図 2 月別の台風発生・接近・上陸数の平年値・

なお、台風の上陸と関連して、中心が完全に本土(北海道、本州、四国、九州の4島)の陸上に上った時をもって上陸、本土以外の島を通過した時や、半島をかすめて横切ったような場合は接近としている。

◇ 台風の衛星写真など

台風を中心や、雲域、雨域は、かつての洞爺丸台風(1929)や第2室戸台風(1959)時代台風のと異なって、現在では、1997年に打ち上げられた静止気象衛星ひまわりの後継機によって、常時監視されている。図2はひまわりによって観測された赤外面像である。なお、赤外面像では低温ほど白く表現される。中心付近に台風の目、目の周囲に広がる雲域が明瞭に見られ、雲頂高度も高いことが分かる。

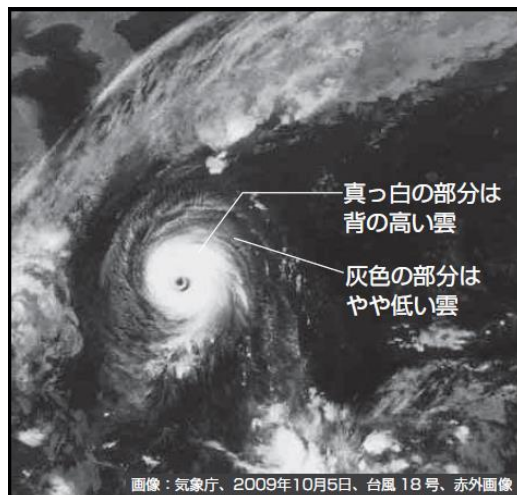


図3 台風の赤外面像

台風を極軌道衛星で見たのが図4である。中心付近に目、目を取り巻いてスパイラルバンド(反時計まわりの雲域)が見られる。

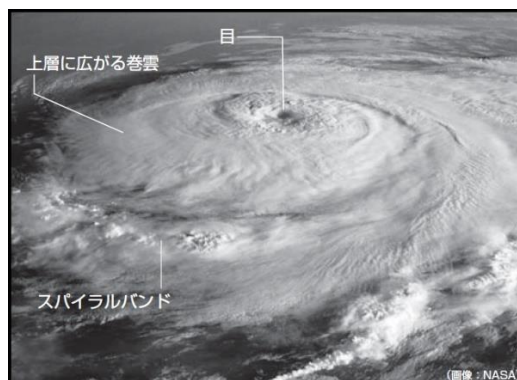


図4 極軌道衛星でみた台風

台風は中心付近に目を持っている。図 5 は、台風の偵察機が撮影した、目および目の壁雲である。上空に太陽が見られる。



図 5 目の内部および周囲の目の壁雲

◇ 熱帯低気圧の発生域と進路

熱帯手気圧は地球を取り巻いて発生する。図 6 は熱帯低気圧の発生域を示す。縦軸は緯度を、横軸は経度を示す。注目すべきは、赤道を挟んで南北約 5 度の領域内には発生が見られないことである。その理由を手短に言えば、この領域内では、積乱雲が日夜発生発達を繰り返すのみで、積乱雲を渦巻に生成する力である「コリオリ力」が働かないためである。

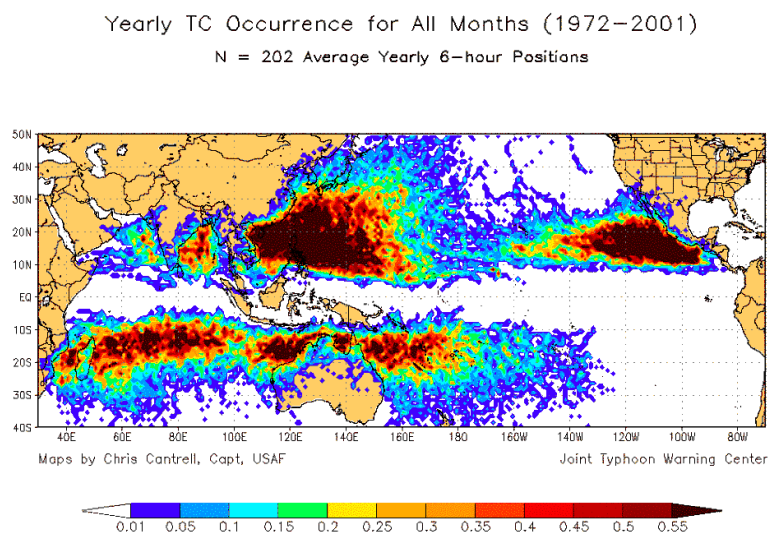


図 6 熱帯低気圧の発生分布

以下次号